第五章　蒼月富士見坂

一

ボカボカとした春の陽気が続いていた。

坂崎磐音が豊後関前藩江戸屋敷の宍戸派の行動を気にしながらも、ゆったりとした気持ちで宮戸川の鰻裂きに出掛け、朝湯を楽しむ暮らしに戻っていた。

磐音ら三人は、今津屋から日当として十一日分の二両三分に由蔵の助け賃を加えた四両ずづを貰った。

溜まっていた家賃やかけで買った米代などを支払っても二両二分は残った。

久しぶりに懐が豊かだった。

「坂崎さん、また一段と腕を上げたな。坂崎さんの鰻は日の通り具合がなんとも塩梅（えんばい）がよくてね。無駄なく一気に切り開かれている証拠だ。」

鉄五郎は磐音が割いたばかりの鰻を手に持って嘆息した。

「いやはや職人はだしと言いたいが、これだけの職人はいませんぜ」

松吉が黙って自分の割いた鰻を差し出した。

「坂崎さんの比べると一目瞭然、手で触っただけで区別がつかあ。松吉、ちったあ性根（しょうこん）をいれて、坂崎さんを見習うもんだぜ」

「ちぇっ、とんだ藪蛇だ」

鉄五郎はその朝から日当を百文に上げてくれた。

磐音は朝餉に満腹して六間堀に出た。するとうなぎ捕りの仕事を終えた幸吉と中橋の手前で出会った。

「仕事は終わったかな」

ああ、と答えた幸吉が、

「今日は早仕舞だ」

「結構結構」

「浪人さん、にこにこしているな」

「借金はない、天気はいい、懐は温かい」

そう答えながら磐音は、

「幸吉どの、どうだな、それがしと朝湯に付き合わぬか」

と誘った。

「朝湯か、贅沢だな」

「そのあと、どこぞで美味しい昼餉でも食そう。」

「奢ってくれるのかい」

「幸吉どのには日頃から世話になっておるでな。一度礼をとおもっていたところだ」

「竹籠を置いて手拭いを持ってくるぜ。猿子橋の袂（たもと）で会おう」

唐傘長屋に向かって飛んでいった。

磐音も一度金兵衛長屋に戻った。

障子戸を開けるときに緊張したが、変わった様子はない。

関前藩江戸屋敷との諍い（いさかい）があるからだ。

手拭いを手にして長屋の木戸口に向かうと、相変わらず褞袍姿の金兵衛が顔を空に向けて立っていた。

「うちの長屋にも鶯（うぐいす）がきてくれるんだねえ」

金兵衛がしみじみ言った。

確かに長屋の南側に植えられた梅の木から美しい声が降ってきた。

「金兵衛どの、いっそ鶯長屋を改名いたしますかな」

「おお、風流な名だ」

二人の話を聞いた水飴売りの女房おたねが、

「どてらを着た大家さんが年中鼻水垂らして、がみがみ小言を言いながら見回っている長屋だ。鶯長屋だなんてちゃんちゃら可笑しいや」

と笑い飛ばした。

「女と小人（しょうじん）は養い難しいというが、洒落もわからねえ」

「ぶんぶん怒る大家とおたねを残して猿子橋に行った。するとすでに手拭いを振り回しながら幸吉が待っていた。

六間湯は橋を渡ればすぐそこだ。

「今日は二人分だ」

磐音が大人八文子供六文の湯銭を払い、磐音だけが二階に上がった。

男湯の二階は湯茶を供してくれる社交場だ。

「いらっしゃい」

馴染みの小女が湯釜（ゆがま）の前に座っていた。

磐音が大小を刀掛に置いて、小女ニコエを残して脱衣場に下りた。

すでに幸吉が裸になって、洗い場に下りていた。

「浪人さん、早く来な。背中を流してやるからよ」

「おお、それは贅沢じゃな」

磐音も素っ裸になった。

「浪人さんはなかなかよい体格をしておられるな」

脱衣場の隅から声がかかった。どこぞの隠居が磐音を見て、

「五尺九寸、十八貫というところか。お侍じゃなきゃあ、すぐに相撲部屋につれていくとこだがな」

お相撲好きの老人か。

「豆腐屋のご隠居、浪人さんを相撲に引きこもうなんてえ魂胆はなしだぜ」

幸吉が叫んだ。

「そうだな、よく見ると年も食ってひねておるな」

豆腐屋の隠居が自分を納得させるように呟いた。

「あきやがれ」

磐音の代わって幸吉がやり返した。

湯汲み口から湯を運んできた幸吉が磐音の背中に湯をかけながら、

「商売が商売だ、体中傷だらけだぜ」

と言った。そう言われて磐音が肩の傷に触れた。

親友の小林琴平から受けた傷だ。

「ここ一年のうちにいろいろとあったでな」

「体も身内だぜ」

幸吉が糠袋で丁寧に磐音の背を擦り上げ、新湯で流してくれた。

「生き返ったようだ。今度はそなたの体を洗ってやろう」

「じょ、冗談じゃねえぜ。深川っ子は他人に洗わすようなことはしねえんだ」

幸吉はどおうやら生え始めた陰毛（いんもう）を見られるのが恥かしいようだ。さっさとざくろ口潜って湯船に入っていった。

磐音も幸吉のかたわらに身を浸した。

薄暗い湯船には男が一人ひっそりと入っていた。

三十前後か、危険な匂いを放つ男が湯から上がると腕に刺青があるのが見えた。

刺青は盗みを働いた者に対して加えられる属刑で、正刑は叩き刑か追放刑だ。

ざくろ口の向こうに男が消えた。

「幸吉どの、なにを食べようかな」

「ほんとにいいのかい、金がかかるぜ」

幸吉が磐音の顔を見た。

「払いなど子供が心配するものではない」

ならばさ、と幸吉が言い出した。

「近頃よ、富岡八万宮の門前町裏にてんぷらってものをくわせるところが店開きしたんだよ。そこの前を通るとよ、なんともいいにおいがするんだ。そいつが食いてえ」

「てんぷらとはまた奇妙な名だな」

磐音には見当もつかない食べ物だった」

「なんでも南蛮から中崎に伝わったものが上方で広がってよ、弁才船の水夫（かこ）たちが江戸にもたらしたんだと。深川沖で獲られた魚や野菜を粉にまぶして油で揚げるだそうだぜ。そんな店が店開きしたんだよ」

天ぷらが江戸市中に広がっていくには安永もすねの頃、後数年の歳月（さいげつ）を必要とする。ともかく目端（めはし）の利いた料理人が始めた新規の食べ物屋らしい。

幸吉は八幡宮の参詣（さんけい）に訪れる（おとずれる）人を相手にする魚料理屋に鰻を卸しに行って、その店、

南蛮名物　　天ぷらや

を知ったという。

「酒も出してくれるのか」

「水夫や船頭が相手だぜ、酒を出さないでどうする」

「ならば案内してくれ」

「けえっ、いきてりゃいいこともあるぜ」

幸吉が嬉しそうに両手で顔を拭った。

脱衣場に上がったとき、刺青男が床の隅にしゃがんでいるのを見た。

が、それだけのことだった。

宮岡八幡宮は寛永年間に江戸湾の洲を埋め立てて創建された。だから、海に近く門前まで堀が伸びて、立派な船着場（ふなつきば）があった。

「お参りに舟で行ける八幡様」

ということで年寄りにまで人気があった。

大勢訪れる参拝客（さんぱい）のために、門前町には魚、鰻、牡蠣（かき）、蛤（はまぐり）など名物の魚料理茶屋が軒を連ねていた。

そんな料理茶屋の間を通り抜ける路地のどんづまり、堀端に小さな広場があった。

幸吉が磐音を連れていったのは、広場の一角に店の半分ほどを水上に張り出した店だった。

確かに幸吉が言うように、

南蛮名物　てんぷらや

と墨書された白地（しらじ）の布が潮風に翻る（ひるがえる）。

客の大半は羽織を着た武士や大店（おおだな）の旦那衆で、奉公人の姿は見かけなかった。まず新奇の食べ物に飛びついたのは、体を使う水夫や船頭たちのようだ。

女客の姿も少ない。

幸吉が、

「こっちこっち」

と堀の水面を見下ろす店の奥の板座敷に連れていった。

「浪人さん、おれはさ、この隣の茶屋にも鰻をおろしに来るんだ。そんときよ、路地に胡麻油（ごまあぶら）の匂いを嫌がるけどよ」

幸吉が油を揚げる匂いをクンクンと嗅いた。

確かに淡泊（たんぱく）な料理茶屋の間では強い匂いを放っていた。

前掛けをした女が注文を訊きに来た。

「てんぷらを二人前と酒を頼もう」

磐音は回りを見回した。

客たちは豪快に溜まり醤油や塩などをつけ、好みで食べていた。

「サイマキ海老、鯊（はぜ）、鱚（きす）、烏賊（いか）、後は牛蒡（ごぼう）、蓮（はす）なんぞをてんこ盛りにしたものを出すかね」

サイマキ海老とは小ぶりの車海老のことだ。

「頼もう」

「おれには飯をくんな」

幸吉が口を挟む。

「あいよ」

女が台所に引っ込み、すぐに二合徳利を運んできた。

「昼間から酒を飲むなんて、浪人さんも罰当たりだな」

「そう申すな。酒どころか空きっ腹を抱えていることが多いのだ。今日は格別、幸吉どのの饗応（きょうおう）だからな」

「まあ、そんなものだ」

磐音は独酌でゆっくりと酒を楽しんだ。

風呂上がりの酒だ、五臓六腑（ごぞうろっぷ）に染み渡ってなんとも美味い。

「うちのお父っつあんも酒好きだけどよ、貧乏な上に子沢山だ。叩き大工の手間賃じゃ、せいぜい建前の振る舞い酒で顔を赤くするくらいだ」

「いや、そなたの家は母上もそなたも、よう父上を助けて働いておる。感心いたす」

「浪人さんには、妹とか弟はいないのかい」

「妹が一人おる」

伊代（いよ）の顔をふいに思い浮かべた。

（嫡男のそれがしが屋敷を出て、どうしておるか）

「浪人さんのところもどうやら金には縁がなさそうだな」

追憶の顔をそうと幸吉は察したようだ。

「お待ちどうさん」

女が皿に天ぷらをてんこ盛りにして運んできた。

「これだこれ、おれが食いたかったのはよ」

「幸吉どの、今日はそなたが正客だ。好きなだけ食してくれ」

幸吉はたっぷりと溜まり醤油をかけてサイマキ海老に食らいつき、

「うめえ！おれ、死んでもいいや」

と叫んだ。

飯を丼で二杯、蜆（しじみ）の味噌汁にてんぷらをしこたま食べた幸吉が、帯を緩めて足を投げ出した。

「浪人さん、ありがとうよ」

「なあにたしたことではない」

磐音は新たに注文したてんぷらを包んでもらうことにした。

「そなたの母上と弟妹（ていまい）太刀に土産っだ」

幸吉が思わず泣きそうになって視線を外した。その視線のが一点に釘付けになった。

「浪人さん、見てご覧よ」

幸吉の目の先では、六間湯で会った男が食いかけの鱚のてんぷらになにかを入れたところだ。磐音からは見えなかったが、幸吉は見逃さなかったようだ。

「あいつさ、六間湯の脱衣場で拾い集めてきた髪の毛を出してよ、油をまぶして天ぷらに入れたんだよ」

「そりゃ決まってらあ」

幸吉が言ったとき、騒ぎが始まった。

「おい、この店じゃあ、客に汚え髪の毛を入れた食い物を出すのか」

暗い眼差しの男が叫んだ。

こうやって見るとなかなか凄みのある男だ。おそらくお上に隠れて生きるやくざか無頼者の類だろう。

台所から親父がすっ飛んできた。

天ぷら屋の主が三十八、九、職人肌の料理人儀助だった。

「お客さん、髪の毛が入ってましたかい」

「おお、見な、これだ」

「お客さん、こりゃ、おれの毛じゃなえ。それに天ぷらと一緒に揚げたものじゃないぜ」

「おい、てめえは言い繕うつもりか」

ふいに店のあちこちから、

「どうしたどうした」

た立ち上がった四、五人の男たちがいた。男には仲間がいるようだ。

「言いがかりをつけて金を強請ろうという気だな」

儀助が腕をまくった。

「てめえは客の髪の毛を食わせておきながら、謝りもしねえで腕ずくでこようてえのか。おもしれえや、こんな小屋がけの店なんぞ叩き壊して堀に投げ込んで見世らあ」

刺青者は懐に合口でも呑んでいるのか、襟の合わせ目に右手を突っ込んだ。

仲間も身構えた。

荒くれ者の水夫や船頭たちをも黙らせる迫力を持っていた。

島帰りか、伝馬町の牢を解き放ちになったような凄みが男たちの五体から漂った。

「おれは見たぜ！」

幸吉が板の間に立ち上がった。

全員がこちらを向いた。

男が幸吉と言わねを尖った視線で睨みつけた。

「あの人がさ、六間湯の床で拾い集めてきた髪の毛を天ぷらに押し込んだの見たのさ」

「小僧、でたらめをいうんじゃねえぞ」

男は低い声で言った。

「おれは目はいいんだ。さっき、ほれ、六間湯で一緒だったじゃないか」

幸吉が手拭いを見せた。

「この餓鬼も店とグルだぜ。構わねえ、叩き壊せ」

刺青者が仲間に命じた。

磐音が立ち上がった。

「おい、さんぴん、黙ってすっこんでな。痛い目をみるぜ」

「ここで暴れてはお客衆にも店にも迷惑…」

「おめえはすっぽんの米次（よねじ）の相手をしようというのか、おもしれえ」

米次を最後に男たちが堀端に飛び出した。

「浪人さん」

店の主が青い顔で呼びかけた。

「心配いたすな、この心張り棒（しんばりぼう）を借りるぞ」

磐音は店の戸口に立てかけてあった三尺ほどの棒を手にした。

男たちの二人はすでに合口を抜いていた。

「てんぷらの代金を支払って退散せぬか」

磐音の声は、盛りのついた牡猫でもおとなしくさせるほどののんびり響いた。

「てめえ、おれっちの面子を踏みつけにしたんだぜ」

男が言った。

「そなた、刺青者だったな。江戸所払いか、叩き刑か」

「うざったい野郎」

声を荒げた米次が懐の合口を抜いて突進の素振りを見せた。が、動いたのは左右の端にいた抜き身の二人だった。

一人は腰に合口をつけて安定させ、もう一人は左袖を突き出してその背後に刃物を隠し、二人が交錯するように磐音に突進してきた。

迷えば死、一人に応じればもう一人の就きを受けて、どてっぱらを抉られる。

生死の修羅場（しゅらば）をくぐり抜けてきた者たちだけがやり遂げる必殺の突進だ。

（浪人さん…）

幸吉の目には、磐音がふわりと動いたように思えた。

右手から腰だめに突っ込んできた男の顔に心張り棒が弧を描いて伸び上がり、がぎっ！

という顎の骨が砕ける音とともに一人が横倒しに倒れこみ、棒はさらに左手から襲いかかってきた仲間の二の腕を圧し折って転がした。

瞬速の迎撃だった。

「やりやがったな」

仲間が合口を抜いた。

「待て」

と仲間に声をかけたのは米次だ。

「失敗だ、引き上げるぞ」

仲間が二人うめき苦しんでいるというのに、米次は落ち着き払っていた。

「おれは決して忘れねえ、借りはしっかり覚えておくぜ」

懐手を抜いた米次は一分金を磐音の足下にねげた。

「そいつは天ぷらやに払う料じゃねえ、おめえの腕の見物料だ。」

米次はさっさと表通りに歩き去った。怪我をした二人を仲間が肩に抱えて必死で後を追った。

天ぷらの店で喚声が上がって、幸吉が胸を張った。

二

坂崎磐音が鉄砲洲の料理茶屋深山亭の門前で呆然としていた。

深山亭が豊後関前藩の宍戸有朝の、江戸次席家老着任を祝う宴が夕刻から催されていた。

このことについて上野伊織からの連絡はなかった。が、磐音が品川柳次郎に頼み、藩邸の前に張り付いてもらった。

その夕暮れ前、柳次郎が金兵衛長屋に走りこんできて、深山亭での宴を告げ知らせてくれたのだ。

「坂崎さん、手伝おうか」

「品川さん、もう十分手伝ってもらった。それにこれは、藩の内紛が絡んでいるので、余り外に知られたくないのです」

「分かった」

と答えた柳次郎に代わって磐音が鉄砲洲に駆けつけた。

宴が始まっておよそ半刻が過ぎていた。

散会の折り、集まった面々の顔を確かめようと、磐音は深山亭の門前を見通す海っペリの暗がりに座り込んでいた。

「なんと…」

磐音は宴の最中に早々と退席する頭巾（ずきん）の男を門前に見た時、顔から血が引くのがわかった。

がっちりした体つき、猪首に外股。

顔を隠そうが、竹刀を何年も交えてきた磐音には推測がついた。

ご手廻り組の一人、入来目八郎だ。

入来は藩主の護衛役のお手回り組に属し、藩政改革に共鳴して修学会にも熱心に参加していた。

剣は神田三崎町の直心影流佐々木玲圓門下、詰まり磐音とは兄弟弟子だ。入門の早い入来が兄弟子にあたる。

磐音が佐々木道場の住み込み時代、毎日のように竹刀を交えた仲だ。剣はひらめきに欠けたが粘り強い剣で、、小林琴平どは、

「爲八郎どのの剣は田舎剣法丸出しだぜ。自分が死んだのも気づかず押しまくってくる。ちったあ、勝負の綾とか呼吸を覚えてほしいものだ」

と、自分のしつこい剣法を棚にあげてこきおろしていた。

それに入来には下から伸び上がってくる必殺の突きがあった。

磐音は、殿のお側近くにいる入来が新しい藩政を志してくれるのを頼もしく感じていたのだ。

新たな驚きが磐音の体を走った。

駕籠から門前に下りたったのは、なんと御直目付中居半蔵だ。

（中居半蔵様まで宍戸はに落ちたのか…）

中居が料亭に姿を没しても、藩にお出入りを許された商人たちが月々と集まってきた。その中には見知った顔もあった。

料亭の二階から流れてくるざわめきはかなりの人数であることを示していた。

４つ前、宴が散会した。

藩士たちは三々五々、料理茶屋を出ると駿河台の藩邸に戻っていった。

その顔ぶれは江戸の藩邸の重役や中級幹部を綱羅しているほどだ。おそらく今夜の宴の出席が、

（えど宍戸派の踏み絵…）

として考えられたからであろう。

藩士の出席者はなんと二十三名を数えた。

それも藩主福坂実高がお国入りしている今、江戸藩邸の中枢を綱羅しているといってもいい。むろん着任祝いという儀礼から出席した者もいよう。だが、この顔ぶれを見れば、いくら儀礼で出たとはいえ、集まりの趣旨は察せられよう。

最後に宍戸有朝の乗り物が深山亭を出た。

宍戸派の三田村平と、その腰巾着といわれた黒河内乾山の二人の姿を見なかったからだ。

（見逃したか、それともまだ料亭にのこっておるのか）

磐音は有朝の乗り物が出て、半刻後、深山亭の明かりがすべて消されたのを見届けた。

不安は増した。

磐音は夜の道を駿河台富士見坂に走った。

上野伊織は宍戸有朝の歓迎の宴の夜にお文庫に忍び込んで、不正に借りられた一万六千五百両の証拠を見つけると磐音に言ったのだ。

鐵砲洲から駿河台まで息を弾ませながらも駆け抜いた。

だが、辿り着いた豊後関前藩六万石の上屋敷は、表門を固く閉ざして森閑と眠りについているばかりだ。

今の磐音にはどうすることもできなかった。

（伊織、連絡くれよ）

もごんの誘いかけを残して駿河台を後にした。

磐音は翌朝、金兵衛長屋を出て、六間堀に差しかかった。

猿子橋から中橋を向かった。

春たけなわで夜明けが早くなっていた。

堀から朝靄が薄く流れて中橋の下に舟が一艘浮かび、なにかを引き上げていた。橋の餓えにも何人か立っていた。

磐音が近付くと幸吉が、

「浪人さん、おっ母さんが天ぷらの土産をありがとうと言ってたぜ」

「なんのなんの」

「初物を食ったから七十五日、長生きするんだと。てんぷらも初物かねえ」

さあな、と首を傾げた磐音は、

「なにがあったのだ」

「ああ、あれかい、辻斬りだよ」

「辻斬りじゃと」

「侍が斬られて堀に投げ込まれたんだよ」

磐音は足早に橋に歩きよった。

小舟には御用聞きの手下が乗って、俯せになった死体を岸に寄せた。

岸では初老の御用聞きと別の手下が筵を敷いて待っていた。

「仰向けにして、手足を持ってあげな」

御用聞きが指図して羽織も着ていない死体が表に返された。

ざんばらになった頭髪が顔にへばりついていた。

「辻斬りじゃあねえな」

御用聞きがつぶやき、死体が岸に引き上げられた。

（上野伊織…）

磐音の五体に戦慄（せんりつ）が走った。血の気がすうっと引いていった。いつも見慣れた光景が暗く沈んでいく。音が段々と消えていく。

「浪人さん、どうしたんだい」

幸吉が磐音の以上に気がついて声をかけた。

磐音はかすかに響く幸吉の声を聞きながらも答えられない。

幸吉が、立ちすくむ磐音の手を持って揺るがすった。

御用訊きの声が戻ってきた。

「懐を探ってみねえ、なんぞ身許のわかるのはないか」

六間堀の朝の光景が見えてきた。

「それがしの知り合いにござる」

磐音の言葉を御用聞きが聞き咎めて、顔を向けた。そして、磐音の異様さに気がついた。

「たしかおまえ様は金兵衛長屋の浪人さんだな」

土地の御用聞きは磐音がどこに住んでいるかを承知していた。

「おまえさん、今、この人の知り合いといいなさったな」

「豊後関前江戸屋敷勘定方、上野伊織でござる」

磐音は傍らに膝をつくと乱れかかった頭髪をそっと掻き上げた。

顔にも体にも拷問を受けた痕を残し、苦悶の形相をした伊織の顔が磐音に何かを訴えていた。

胸前が血に染まり、小さな穴が開いていた。

刺し傷だ。

それも迷いなくひと突きだった。

路上で拷問をするわけもない。

藩邸か、どこかに連れ込まれて拷問を受け、殺された末、死体をわざわざ深川六間堀で捨てたことになる。

その意図は明白だった。

磐音に手を引かせるべく脅かしをかけていた。

そして、必殺の突きに残された殺し手の影も磐音も見ていた。

「どうですか」

厳しい顔の磐音に訊いた。

「間違いござらぬ」

「わっしは、南町の定廻り同心木下一朗太に監察を頂いている、深川元町の佐吉と申しやす。お話を聞かせてもらってもようございますか」

頷いた磐音は幸吉に、

「事情を話して、てつごろう親方に少し遅くなると伝えてくれ」

と頼んだ。

幸吉は磐音を心配そうに見ると宮戸川へ走っていった。

「番屋にいきましょうかい」

佐吉は森下町の番屋に磐音を誘った。

中橋からはすぐのところだ。

番太（ばんた）のじいさんに茶を出させた佐吉は、

「この爺様は耳が遠くてね、話を聞かれる心配はございません」

と言った。

「親分さんは南町奉行所と関わりがあると申されたか」

「へえ、どなたか知り合いがいらっしゃるのでございますか」

「年番方与力の笹塚孫一様とはしりあいでな」

「笹塚様をご存じで。そうでしたかい」

と佐吉が頷いた。

「親分、それがしは豊後関前藩の家臣であった。詳しいことはもうせぬが国表で騒ぎがあってな、藩に暇乞いをした。昨年の夏のことだ。」

磐音は藩政を巡って守旧派と改革はの対決があり、その諍い（いさかい）の中で上野伊織が犠牲になった可能性があると示唆した。

磐音の脳裏（のうり）には上野伊織を手にかけた人物が浮かんでいた。だが、町方に言うべきことではない。

（これは坂崎磐音への挑戦なのだ、決着は自分の手でつける）

佐吉も、

「となると、町方の出る幕はないかな」

と独り言のように呟いたとき、上野伊織のいたが運ばれてきた。

「親分さん、それがしが金兵衛長屋に住まいしていることはすでに藩邸には知られておることだ。とはいえ、これ以上、広めたくもござらぬ。そのとろをよしなに頼む」

「へえ」

と応じた佐吉は、

「わっしが南町の木下の旦那と相談しまして、お屋敷に奉行所の方から知らせることにいたしましょうかい」

と答えた。

宮戸川で仕事を終えたとき、てつごろうが裏庭に入ってきた。

「坂崎さん、南町の旦那がおめえさんを訪ねてきなすった」

「造作をかけます」

「二階座敷を使いなせえ、誰にも邪魔はさせねえ」

鉄五郎のあとに従って行くと佐吉親分と二人の役人が立っていた。

一人は年番方与力の笹塚孫一だ。

もうひとりの小太りの若い同心が定廻りの木下一朗太だろう。

「また会うたな」

大頭の切れ者与力が言った。

「殺しの現場にお出張りなさることもあるのですか」

「そなたがわしの名を出したのではないか」

「そうでしたな」

磐音の声音は平静に戻っていた。

「一郎太、この御仁を甘く見ちゃいけねぜ。大した腕前だ」

孫一は与力も思えない伝法な口調でかたわらの若い同心に話しかけ、てつごろうに、

「主、二階を暫時お借りする」

と言い捨てるとさっさと階段を上がっていった。

二階座敷に上がったのは笹塚と木下、それに磐音の三人だけだ。

「ごゆっくり」

と言い置き、階下に下りていった。

「坂崎さん、豊後関前藩の内紛に町方が首を突っ込む気はない。胸に仕舞っておきたいというならそうもしよう。だがな、人間一人が殺されたんだ、子細をまず話してくれぬか」

「そのつもりでした…」

磐音は前置きすると、友二人と帰郷した昨夏（さっか）の事件から上野との再会、さらには昨夜見た鉄砲洲の宴までを話した。

長い話がおわったとき、笹塚が立て続けに大きなくしゃみをした。

「坂崎さん、わしは、嫌な話を聞くと、くしゃみがでるのだ」

と言い訳すると手拭いで鼻を擤んだ。

「上野伊織どのは藩の守旧派の何者かに粛清されたと考えていいのかな」

「話しましたとおり、藩には一万六千五百両の不正な借り入れ金がございます。伊織は昨夜、御文庫に入ってその証拠を調べると言うておりました。」

「藩名で不正に金を借りた一派がそれを嗅ぎつけ、始末下とは大いにありうるな」

「だが、今の所それは推測」

「いかにも」

笹塚村市はしばらく思案していたが、

「坂崎さん、どこにも始末に負えない手合いはいるものだな。江戸でかようなことをしでかして無事に済むと思うとはのう」

と嘆いた。

「守旧派の者で鐵砲洲の宴に出なかった者、あるいは遅れて出た者か。とにかく、上野どのを殺した者に心当たりはないか」

磐音は首を横に振った。

孫一はじっと磐音を凝視していたが、まあ、いいだろうと呟いた。

「それがしは、藩主福坂実高様が国表に滞在しておられるときに、豊後関前藩が江戸でこれ以上騒ぎを繰り返さないでほしいと願うだけ…」

「そなたがじっと静観しているとも思えぬがな」

そういった笹塚孫一が、

「一郎太、わしらはあまり首を突っ込まぬほうがよい。こいつは早めに大目付に引き渡すことだ」

と命じた。

磐音が長屋に戻ったとき、すでに昼はかなり過ぎていた。

磐音は三柱の位牌の前に座った。

「慎之輔、琴平、舞どの、そなたらが死んだ背景には黒黒とした陰謀が横たわっているようだ。また新たな犠牲者が出た…」

どうしたものかと三柱の位牌に話しかけた。

「浪人さん」

幸吉の密やかな声がした。

手に茶碗を持っていた。

「おっ母さんが浪人んさんにもっていけって」

見れば炒り豆が入っていた。

「騒ぎでさ、朝飯を食っちゃいないだろう。うちにはこんなもんしかねえんだ」

「ありがたく頂きしよう。幸吉どのも一緒にたべぬか」

「そいつをくうを空っ屁ばかり出てよ、おれはごめんだぜ」

磐音はとんぶりに炒り豆を移し、

「母上によろしゅうな」

「ああ」

と答えて長屋の敷居をまたぎかけた幸吉が、

「気を落とすんじゃねえぜ」

と言うと体を翻して姿を消した。

磐音は喋りかける相手もなく豆をぽりぽりと食べた。

日光街道駒込追分の先にある海蔵寺が、豊後関前藩の菩提寺であった。

上野伊織の惨殺死体をわざわざ大川を越えて六間堀まで運んで放置した日から三日後の夕暮れ前、坂崎磐音は一人海蔵寺の墓地（ぼち）を訪ねた。

海蔵寺の広い墓地の一角に、江戸で亡くなった藩主一族や側室の墓地が建ち、その周囲を固めるように家臣たちの墓や卒塔婆（そとば）が並んでいた。

磐音は真新しい卒塔婆を見つけた。

勘定方上野伊織のものだ。

磐音は瞼を閉ざした。

伊織と愛宕権現で甘酒を飲みあった時の顔が浮かんだ。

（無念であったろう、伊織。そなたのあだはこの坂崎磐音が討つ）

磐音が伊織の霊に約束したことはその一事だ。

卒塔婆の前から山門に戻ろうと振り向いたとき、閼伽桶（あかおけ）を提げた女が一人立っていた。

哀しみに暮れた顔に磐音は覚えがあった。

女も磐音を見ると、

「あなた様は坂崎様にございますね」

と訊いてきた。

「いかにも坂崎だが、そなたは豊後関前藩と関わりのあるお方かな」

女がうなずいた。

「藩の中間頭を務めます斎藤六助の娘、野衣にございます」

「斎藤野衣どのか。僭越ながらお尋ねいたす、伊織のお参りにこられたか」

夕暮れの中、白い顔が頷いた。

磐音は伊織の私生活についてほとんど知らなかった事に気付かされた。

それは中老職六百三十石の嫡男と勘定方六十七石という下士の身分が、修学会の他、付き合いを許さなかったからだ。

「坂崎様は伊織様と最近お会いになっておられたのですか」

「伊織さまが密かにお会いになっていた方が坂崎磐音でしたか」

野衣が納得したように呟く。

「野衣どの、そなたと話がしたい」

野衣が辺りを見回した。

「坂崎様、ここは危のうございます。後日、どこぞで…」

両国西広小路の両替商今津屋でと磐音のくちから出かかったが、伊織が殺された旧派に知られていると思えた。

「野衣どのがよく行かれるところはないか」

「神田明神の境内にある茶屋ではいかがにございますか」

駿河台の藩邸から神田川を挟んで対岸にある神田明神ならそう遠くもないし、野衣が参りに行ってもおかしくはないだろう。

「明日の昼過ぎではいかがでしょうか」

「承知いたした」

磐音は豊後関前藩の菩提寺（ぼだいじ）を離れた。

三

神田明神は江戸では古い神社の一つだ。創建は聖武帝の天平（てんぴょう）二年と言われる。

主神は大己貴命（おおなみちのみこと）

神田明神の秋祭りは、山王祭、根津権現の祭礼と合わせて江戸の三大祭りといわれ、江戸っ子は将軍家もご覧になる天下祭を楽しみにした。

坂崎磐音が梅の香りに満ちた神田明神の境内に入っていったのは昼前のことだ。

まだ斎藤野衣の姿はないようだ。

拝殿で参拝（さんぱい）を済ませた磐音は梅林（ばいりん）に一軒の茶屋を見つけ、入った。そこからは梅林越しに、山門から本殿へ向かう参道を見ることができる。

「茶をくれぬか」

小女に頼んだ磐音は縁台の一つに座った。

磐音が参道を眺めていると茶が運ばれてきた。

「すまぬな」

磐音は無意識のうちに礼を述べていたが、茶を運んできた女は立ったままだ。茶代が先かと懐に手を入れかけて、女の顔を見た。

なんと、地味な縞模様の着物を着た斎藤野衣だ。

「ここは知り合いがやっている店にございまして、祭り時には手伝いに参ります」

「そうであったか」

「こちらへ」

野衣は磐音を茶店の奥のちいさな座敷に連れて行った。

「ここなら人に見られることはございません」

中年の女が茶を運んできて、ごゆっくりと言い残して姿を消した。その女主が野衣の知り合いであろう。

「坂崎様が国許にお帰りになったあと、大変騒ぎが…」

「江戸屋敷に伝わったそうな」

「噂も流れておりましたし、伊織さまも興奮なされて坂崎様方の身をあんじておられました」

「われら三人が闘争をしいられたのは、うつけ者が無責任に撒き散らした風聞が元かとつい最近まで思うておった。が、上野伊織がそれがしの長屋を訪ねてきて、古い考えに固執する藩の重役方が仕組んだことではないかと示唆してくれたのだ。事態が急転したのはそれからだ。」

二度にわたり、磐音の長屋に侵入した藩士がいたことなどを野衣に告げて、確かめた。

「野衣どの、そなたは伊織と将来を誓い合った仲か」

野衣が小さく頷いた。

その顔が哀しみに沈んだ。

「もはやそれも終わりました」

ここにも一連の騒動の犠牲者がいた。

「そなたは宍戸有様の江戸次席家老着任の祝いが鉄砲洲で行われたことは、承知しておろうな」

「はい」

「その夜、伊織は御文庫に忍びいり、あることを調べるつもりであった。おそこら伊織はその現場を押さえられ、拷問を受けた後、殺されたのであろう」

野衣の顔が歪んだ。泣きそうになったがかろうじて踏みとどまった。

「伊織様があの夜、御文庫に入ることは存じませんでした」

磐音は野衣を見た。

「あの夕刻、伊織様は私のお長屋を訪ねてこられて、これを置いて行かれました」

部屋の隅に置かれていた薄い風呂敷包みを取ると磐音に差し出した。

「日誌（にっし）にございます」

「伊織はそなたにこれを預けたとき、なにか申したか」

「もし我が身になにか起こったとき、処分せよと申されました」

「処分せよと命じられた日誌をそれがしにわたしてよいのか」

「海蔵寺で坂崎様にお会いしたあと、初めて包を開けて日誌と知りました。坂崎様、読みましてございます」

磐音が頷く。

「坂崎様と再会した日のことを伊織さまはなんとも嬉しそうに記述しておりました。私は近頃の伊織様がどこかよそよそしく隠し事をなさっておられるとおもうておりました。ですが、それは心得違いでした。伊織様も坂崎様も、藩騒動の黒い渦の中に巻き込まれて折られたのですね」

「伊織がそなたに何事も話さなかったのは巻き込みたくなかったからだ」

「はい」

野衣の双目は涙で潤み、

「この日誌は処分してはいけない、坂崎様にお渡しすべきものと思います」

と言うと日誌を渡した。

分厚い日誌の表紙には、

「明和九年正月起稿

勘定かた上野伊織備忘録」

とあった。

「坂崎様、伊織様の仇を討ってもらえませぬか。このことができるのは坂崎様だけにございます」

野衣がきっぱりとした口調で迫った。

「それがしとして伊織の敵を放置しておく気はない。野衣どの、しばし時間をくれぬか」

野衣が頷いた。頷いた。

「見事本懐（ほんかい）を遂げた暁には、上野伊織の霊前にお誘いいたそう」

「お願い申します」

お平伏した野衣の背は震えていた。

その夜、磐音は長屋の行灯に油を注ぎ足すと灯心を掻き立てた。

ぽうっと明るくなり、三柱の位牌が浮かんだ。

正座した磐音は上野伊織の日誌を開いた。

修学会の折に見た几帳面な字がぴっしりと並んでいた。

＜卯月（うづき）５日夜明け前、坂崎磐音様、河出慎之輔様、小林琴平さま三方を品川宿にて見送る。

坂崎様はゆくゆくは豊後関前藩の中枢に座られる人物なり。藩政改革の指導的な役割を果たされることを熱望す。

新風は国表から吹き、江戸に伝播（でんぱ）するであろう。

琴平様、品川宿妓楼にて一夜をすごさんと主張なされど、坂崎、河出様に拒絶され、しぶしぶ六郷川へと向かわれし。この三方幼馴染みにして格別に親しき間柄、兄弟同然と言いたきも、血を分けた肉親以上の交わりにて羨ましきことこの上なし。河出様の奥方は小林様の妹舞様にて、帰国の後には坂崎様も小林様の妹奈緒様と祝言のこと、さらに密なるかかわりとならん。

ともあれ、三方が原動力になってよどみによどみして藩政に風穴を開け、多額の借財を減らし、減給続きの俸給が元に戻されんことを切に祈る。が、そのためには家臣一同死をも念頭に置いた覚悟あるべし…」

なんという潔い決心か。

磐音は、あのときすでにこれだけの覚悟をつけていた勘定方が江戸藩邸にいたことに考えが及ばなかった己を恥じた。

磐音はひっしをめくった。

＜皐月十一日、国表より悲報到着す

江戸屋敷騒然たり

伝聞によれば、江戸勤番を終えて帰国なされし御先手組組頭河出慎之輔さま錯乱の上、奥方舞様をお手打ちいさされしとの事。それに憤慨なされし小林琴平さまが河出様、河出様叔父小普請組蔵持十三どのの二人を殺害におよび、さらにはお番組かしら山尻様次男頼禎様斬殺にお及ばれしとか。

後刻、小林琴平様に上意討ちの藩名が下り、討ち手に坂崎磐音さまが選抜されし由（よし）。激闘数刻の後、坂崎様上意討ちを見事果たされたり。

今や河出様小林様なく、坂崎様は重傷を負われしとの事。

嗚呼、何たる悲劇。

あれほど親密な交わりをなされし三方が互いに斬り合い、殺し合いをなせりとは。

真実はいかなることにや、甚だ混乱してやまず。間違いであれと神仏に祈る他手立てなし。

三方の悲惨なる運命と同時に藩政改革は大きく後退したり…＞

更に２日ごの日誌には、

＜…御直目付き中居半蔵様より修学会解散の命下りたり。何たる不運。

二つの事件はただの偶然か。それとも何らかの関わりありやなしや。慎重に見極めるべし。江戸藩邸の修学会同志これまでのごとく会う事も適わざりけり＞

伊織は実に冷静に、自分の周辺に起こりつつある騒ぎを分析していた。

＜皐月十三日、関前より早飛脚到着。まず河出、小林両家に廃絶の沙汰ありとのこと。

なんたる早手回し、坂崎磐音様の怪我定かならず、不安至極。

第二報によれば、城下にて河出舞様と山尻頼禎の密通の噂ありと蔵持十三が河出様に讒言（ざんげん）いたせし事が事件の発端（ほったん）なり。

だが、我、納得できず。

河出様は気性温厚（おんこう）にして冷静なる大人なりしが、なぜ舞様を斬殺なされたか…。

江戸屋敷に、国表の事件を藩士同士が語らう事を厳禁する旨の通告あり。なんたる専横なりや。わが豊後関前藩の内政後退せり…＞

坂崎磐音の記述が継に現れるのは６月中旬だ。

＜水無月十二日、藩邸の奥にて漏れ聞きしところによると、刀傷に臥せっておられし坂崎磐音様が暇乞いを残されて関前藩をでられた由。

坂崎様のことゆえ、深慮あっての行動ならん。愚考するに、坂崎様の行く先はこの江戸ならん。それがし再会を切望し、事の真相を確かめたし。ただ藩邸上層部において、坂崎様の暇乞いはなんぞ事由あっての事と警戒する重役方ありと聞き及びたり。

また本日、ご手回り組入来爲八郎様、勘定方御用部屋にきたりて坂崎様の国表退出を聞きしかと問われり。頷くと、修学会の再開のための出奔と欣喜雀躍セリ。

それがし、全く考え及ばず虚を衝かれたり。

入来様、もし我に坂崎様よいｒ連絡あればそなたに知らせると言い、もしそなたに連絡あれば我に知らせよと言いおきて去れり。

もし入来様の推量通りなれば、藩政に希望の燭光（しょっこう）再びともれり＞

入来爲八郎は過日の宍戸有朝の歓迎の宴に出席した人物だ。

（もしや…）

入来は最初から宍戸派の命で修学会に送り込まれた人物ではあるまいか。

そう考えれば、騒ぎのあとに収穫会が中止されたのも頷けた。

伊織の日誌にはしばし入来の名が登場するようになる。

＜文月三十日、残暑例年になく厳し。江戸の諸物価高騰し、四民の暮らし尋常ならず。

我、このひと月、懐疑が生じたり。

坂崎様らの国表での闘争、偶発的なものにあらず、仕組まれた罠ではないか。

その理由を我が心覚えの爲に記さん。

一　帰国早々河出慎之輔様を蔵持十三どのはなぜ待ち受けたるか。国表の事情のわからぬ河出様に同様を与えるには、江戸より帰国した直後の河出様にはなすべしと企てた人物なしや。

一　小林琴平様の刃傷はおそらく、事を企てし人物の考えを超えたる直情的な行動にあらん。だが、結果は当の人物にとり万万歳。なんと改革はの二人が死に一人が重傷を負えばなり…。

一　蔵持どのはたれに唆されたか。藩政を改革せんとする若手藩士たちの行動に不安を覚えし藩重役かたではあるまいか。

国許では国家老宍戸文六様が、江戸屋敷では公儀人の原伊右衛門様が改革を好ましからずと考えておられる由。もしや改革派の中心たる坂崎様ら三方を自滅の道に追い込めるのであれば、宍戸様方の利権はこのまま存続せり。わが懐疑とはこのことなり。

ただし、確たる証拠は今のところなし…＞

すでに上野伊織は、磐音が江戸に出てきた７月には疑いを抱いていたことになる。

磐音は伊織の日誌をだいぶ飛ばした。

そこには磐音と再会したあとの伊織の喜びが記されていた。

例えば、

＜…本日、坂崎磐音様と愛宕権現社にて面談。おそるべき事実をきかされたり。関前藩にはなんと一万六千五百両のも不正な借財あり。その内訳は、

天王寺屋五兵衛　　八千両

近江屋彦四郎　　三千五百両

藤屋丹右衛門　　五千両

借り手は江戸家老の藤原三左様。藤原様の一昨年、美濃太田宿の材木問屋濃尾屋を通じて天領飛騨の材木の払い下げを請い、江戸に運びて貯木なされし由。材木の値上がりを待っての相場なり。だが、昨年２月の目黒の大火がこの投機を文字通り灰燼に帰せしめたり。貯蔵された材木にも火が入りて、関前藩は新たに一万六千五百両に加えるに高利の利息、保管料など多額の借財を負いしとか。両替商今津屋の調べなれば、まずたしかなことなり。

この事、勘定方のそれがしも知らず。

いまいに臥せっておられし篠原三左様は関わりなき事と推測致し候。

さて、勘定方なるそれがしが藩より微禄ながらもお扶持を頂戴するは、藩の危難に際して命を投げ出す事と心得たり。

我、御文庫に入りて、なんとしても不正の借財を爲せし人物と証拠を探さんと欲す」

死の前日にはこうあった。

＜…本日午刻、入来様、勘定方御用部屋来室。坂崎磐音様と再会致したかとしつこく問われたり。入来様は修学会の仲間なれど坂崎様の事告げず。大事なり、守秘は殊更注意すべきことなり。まして明夕刻、御用部屋に入ることを企てたればなり＞

これほど用心深く行動したにもかかわらず、上野伊織と坂崎磐音の事が宍戸派の知るところであったとは。

磐音は日誌を閉じた。そして、三柱の位牌の傍らに置いた。

行灯の明かりを消して眠りに就くか。

そう考えたとき、長屋の溝板を遠慮深げに踏む音を聞いた。

磐音は包平を引き寄せ、片膝をついた。

「夜分すまねえ。おちらは宮戸川で仕事をしてなさる浪人さんの長屋ですかい」

気の弱そうな声がした。

「どなたかな」

「幸吉の父親でさあ」

包平を置いた磐音は狭い三和土（たたき）に下りて心張り棒（しんばりぼう）を外して、戸を開けた。

「すまねえ」

無精髭の顔が除き、また謝った。叩き大工の磯次だ。

「こちらに幸吉がお邪魔しておりやせんかい」

「いや、来ておらぬが」

磐音に不安が走った。

「戻っておらぬのですか」

「へい、夕方にこちら使いがあったとかで出かけたきりなんで」

「それがし、幸吉どののもとに使いなどやってはおらぬが」

「やっぱり…」

磯次はそう言うと、

「かかあがね、あの浪人さんが夜通し幸吉を引き止めるわけがないというんだが、念のために訊きに来たんでさ」

「使いとはどこのだれじゃ」

「若い男が、金兵衛長屋の浪人が呼んでいると言い残してったらしいや。薄暗がりで人相風体は分からなかったそうだが」

「幸吉どのは使いの者を見たのか」

「いや、幸吉が油屋まで行った留守の間のことでね、帰った足でこちらの長屋に駆けつけたってわけでさ」

「騙られて誘い出されたな」

「かどわかしかい。うちにゃ銭なんぞねえがな」

「狙いがそれがしかな」

磐音は天ぷらを食いに行った先で争いになった事を告げた。

「その話は聞いたが、まさかなあ」

磯次が首を捻った。

「親父どの、あやつらだとしたら、それがしかそなたの長屋に連絡が入ろう」

土間から敷居をまたぎかけた磯次が振り向き、

「浪人さん、幸吉は大丈夫だよな」

と訊いた。

「親父どの、この坂崎の一命に代えても幸吉どのは取り戻す。しばらく時間をくだされ」

磯次は頷くと出て行った。

磐音は手早く外出の支度をした。脇差しを差し、大包平を手にした。

夜道（よみち）を駆けていった先は、福岡八幡宮門の権造（ごんぞう）一家だ。

権造はやくざと金がしを兼業する親分だ。

幸吉とは鰻捕り仲間の参次の姉が、借金のかたに岡場所に売り飛ばされようとしたとき、磐音が中に入って、強引に手を打たせていた。

そのとき、権造と関わりを持った。

ともあれ、権造が深川本所界隈の後ろ暗い世界に詳しいと磐音は睨んだ。

表の障子戸は閉じられていたが明かりが灯っている。朝は弱いが夜に強い、とやくざの世界の相場は決まっていた。

磐音が障子戸を叩くと、

「だれでえ、こんな夜中によ」

と不寝番の子分の声が問うた。

「権造親分か代貸（だいがし）五郎蔵に会いたい」

「夜中に駄目だ駄目だだめだっ！」

「開けねばとを踏み破るぞ」

磐音が二度三度と蹴り飛ばした。

[ちくしょう、どこのどいつだ！」

慌てて戸が開いた。

磐音が土間に入り込むと、騒ぎを聞き付けた子分たちがおっとり刀で奥から飛び出してきた。その中に代貸の五郎蔵も混じっていた。

「おめえか」

「五郎ぞ、ちと知恵を貸してもらいたい」

「やい、さんぴん！藪（やぶ）から棒に夜中に来やがって知恵を貸せもねえもんだ」

派手などてらを着た権造もそのそと出てきた。酒でも飲んでいたか顔が朱に染まっていた。

「親分、起きておられたか」

「おめえさんか。用事はなんでえ」

「泥亀の米次一味（いちみ）のねぐらをしらぬか」

「ほう、泥亀の米次な」

権造は関心を示して二階への段階に腰を下ろした。

「何があったか話してみねえ」

磐音は天ぷらやの一件から幸吉が磐音の名を騙って呼び出され、拐かしに遭ったことまでを話した。

「鰻捕りの幸吉を拐かして金を強請ろうなんて間抜けはおるまい。となれば、泥亀の米次がそれがしへの嫌がらせに連れていったと考えるのが順当だ。蛇の道は蛇、そこで親分さんの知恵を借りに参上した。

「ちぇっ、急にさん付けしやがったぜ」

「頼みごとをするの余り高飛車でもな」

「夜中にこれだけの騒ぎを起こしといて、なんて言い草でえ」

と行った権造は、

「おい、浪人、この世界じゃあ、頼みごとはすべて金ずくだ。金はあるんだろうな」

「ない。見ての通りの貧乏浪人だ」

「話にならねえ」

権造が立ち上がろうとした。

「親分、あやつらを野放しにしておくと権造一家の看板にも差し障りがあろう」

「始末くらいうちでもできらあ」

「ならばどうして始末せぬ」

「それは…」

「親分、ものは相談だ。それがしの腕を一度だけを親分に貸そうではないか」

磐音は手にしていた備前国包平の柄頭を手で叩いた。

磐音の顔を見ながら権造が思案した。

「いいだろう。おれもな、泥亀の米次がのさばり出したのを快く思っちゃいねえのさ。おめえの住まいはどこだ」

「六間堀町の金兵衛長屋」

「夕刻まで時を貸せ、あいつらの隠れ家をいぶりだして知らせるぜ。その代わり、約定を忘れるな」

磐音は頷くと権造一家を出た。

四

磐音は落ち着かない一日を送った。

泥亀の米次から連絡が入ったのは宮戸川に鰻割きに行っている間だ。

長屋に紙礫が放り込まれていた。それには、

＜永久寺三十三間堂に夜９つ　泥亀＞

とだけあった。

このことを磯次一家に知らせ、

「心配いたすな、命に代えても助けだすからな」

と言い足した。

磯次は不安そうな顔でぺこりと頭を下げた。

夕刻、権造一家の代貸五郎蔵が三下を連れて金兵衛長屋に姿を見せた。

「浪人、ドロガメの巣が分かったぜ」

「かたじけない」

「深川十万坪の埋め立て地、砂村新田に近い葦原の水辺の小屋が隠れ家だ。江戸所払いの米次たちは市中に住めねのよ十万坪は広いが、目印はひょろりとした五本松だ。松のしたには野仏が鎮座しましてらあ。」

「助かった。このとおりだ」

磐音は頭をさげた。

「今日はえらく殊勝だな、浪人」

と笑った五郎造が、

「泥亀の野郎、懐に飛び道具を忍ばせているそうだぜ」

「短筒かな」

「いや、火箸だそうだ」

「火箸投げか、聞いたこともないな」

「突き立てられて目が潰れた者が何人もいるてえ話だ」

「良いことを聞いた」

「親分の伝言だ。泥亀をきっちり始末してくれってな」

「承知した」

五郎造らが長屋から消えた。

磐音はしばらく考えた末に外出の支度を整え、宮戸川へ向かった。

坂崎磐音は４つの時鐘を、十万坪の西を占めた肥後（ひご）熊本藩五十四万石細川越中守の町屋敷近くを流れる運河で聞いた。

宮戸川の鉄五郎親方が都合した猪牙舟の櫓を品川柳次郎が握っていた。

深川十万坪は宝永年間に江戸市中から排出する芥の埋立地だ。それを亨保八年に近江屋庄兵衛と井籠屋万蔵が新田開発を幕府に願って造成した、広大な新地である。

江戸藩邸の勤番侍だった磐音には、茫漠（ぼうばく）たる十万坪がどうなっているのか見当もつかない。そこで深川に生れ育った品川柳次郎の助けを借りた。

「しかし、坂崎さんの周りではいろいろと騒動が尽きませんね」

蒼い月が十万坪を囲む運河を照らしつけていた。

「それがしが望んだわけではないが」

猪牙舟は東から南へと運がに沿って方向を転じた。

左手には砂村新田が黒々と広がっていた。

「五本松が、ほれ、右手に見えてきました」

小島のように盛り上がった岡に痩松が五本浮かんで見えた。

「あの明かりですね」

柳次郎が指したのは、五本松の脇から葦原を西に突っ切って伸びる水路の先に、明かりを漏らした一軒の小屋だ。

「泥亀なんてよく行ったもんだ。泥水のそばにすんでやがる」

「江戸所払いの身ゆえ、市中に住むことはできないのだろう」

「十万坪だって朱引内だ。もっとも、ここを江戸だなんてだれも思っちゃいませんがね」

「品川さん、舟を五本松の下に着けてください」

「手伝いましょうか」

「幸吉の命に関わることだ。こればかりはそれがしの仕事です」

磐音のせいで幸吉は不運な目にあっていた。

無灯火の猪牙舟が五本松の下の岸辺にぶつかって止まった。。

「いつでも漕ぎ出せるようにしておきます」

「頼みます」

磐音は腰を捻って包平を落ち着けると舟から陸に飛んだ。

五本松の下に野地蔵があった。

泥亀一味が潜む一軒家は葦原の水辺に建っている。

磐音は慎重に地形を見定めたあと、枯れた葦原の中に踏み固められた小道を選んだ。

「そろそろ刻限だぜ」

磐音が米次の声を耳にしたのは、泥龜一味の舟のそばだ。

「小僧を舟に載せな」

小屋の戸が開いて、小太りの男が幸吉を肩に担いできた。

磐音は包平を鞘ごと抜くと舟の傍らにかがんで待った。

「ちくしょう、餓鬼のくせにえらく重てえぜ」

幸吉は猿轡でもかまされているのか、くぐもった息が漏れていた。

男が幸吉の体を舟の中に転がそうとした。

磐音が立ち上がったのはそのときだ。

「うっ！」

驚く男の鳩尾に包平の鐺が突き込まれた。

男が幸吉を担いだまま頽れた。

磐音は方から落ちかけた幸吉を抱き止めた。

が、男は船縁に体をぶつけて倒れこみ、音を立てた。

磐音は猿轡を解くと、

「幸吉、大丈夫か」

「ああ、浪人さんなら助けに来てくれると思ったぜ」

「よし、小道を走れ。五本松の下に品川産が猪牙舟を着けておる」

磐音は幸吉の尻を叩いて五本松の柳次郎野本へ逃した。

明かりが小屋から走った。

「畜生、野郎の法から押しかけてきやがったぜ」

泥龜の米次の声がして、小屋からばらばらと男たちが飛び出してきた。

その数は五人だ。

右手を懐に突っ込んだ米次が最後にのっそりと小屋から出てきた。

磐音は両手を腰に当てた格好で迎えた。

「気に食わねえ野郎だぜ」

ぼそりと言う米次の言葉を合図に、男たちが合口を抜いた。

どれも刃物がてに馴染んだ男ばかりだ。それに血に飢えた生き方が察せられた。

「泥龜とはまた奇妙な名をつけたものだな」

磐音の声は長閑に響いた。

それが米次が苛立たせた。

「米次、このまま江戸を引き払わぬか」

「けっ」

吐き捨てた米次が懐手のまま、仲間を肩で掻き分けて立った。

磐音と間合いは五間。

「小屋からの明かりを背に受けて、米次の顔は暗く沈んでいた。」

「たびたび虚仮にされたんじゃあ、稼ぎに差し障らあ。死んでもらうぜ」

米次は一歩二歩進むと懐の手を音もなく抜いた。抜いた手に小ぶりの火箸が光って見える。

同時に、磐音の腰に当てられていた手が袴の背に回っていた。

火箸が飛び、磐音のてから小出刃が抛たれた。

二つの飛び道具は最短距離の生死の境を飛んで中間で絡み合い、小出刃が火箸を水面に弾き落とした。

「ちくしょう！」

米次は懐に手を入れてもう一本の火箸を抜こうとした。

が、袴の背の小出刃を磐音が掴んだのが先だった。

てが捻られ、小出刃が飛んで、火箸を抜き取った泥龜の米次の喉元に突き立った。

のけぞった米次は、

ぐうっ！

という声を洩らすとずるずると後退していき、尻から砕けるように水辺に落ちた。

磐音が投げたのは、宮戸川が細り使わなくなった古出刃だ。それを鉄五郎親から貰ってきたのだ。

「やりやがったな！」

仲間の一人が声を上げたとき、備前国大包平二尺七寸を抜き放った磐音が、血なまぐさい仕事に明け暮れてきた男たちの輪の中に疾風のように飛び込んでいった。

駿河台の坂に青い月明かりが落ちていた。

寒夜が戻っていた。

寒雷だ。

風が坂上からさかしあに緩く吹いていた。

じっとしていれば手がかじかむほどの寒さだ。

最晩年、駿府（すんぷ）に隠棲していた家康がなくなった後、従っていた家臣たちが江戸に戻って与えられた拝領地が駿河台である。

豊後関前藩六万石の上屋敷は駿河台富士見坂の北側、旗本屋敷に囲まれるようにあった。

表門から御城に向かって南に下りると、右手に常陸土浦九万五千石の、左側には山城淀藩十万二千石の上屋敷が向かい合っていた。

富士見坂の途中に大銀杏の木があった。

坂下から上がってくる関前藩の者は、木を過ぎれば我が藩邸の塀と目印になった。

葉を落とした大銀杏の木の下で坂崎磐音が徹夜を始めて三晩目、ようやく坂下に探し求めていた影を認めた。だが、その影には提灯を手にした連れがあった。

小者か若党をつれているのか。

（どうしたものか…）

迷った。

が、提灯の明かりに照らしだされたのは徒士組の黒河内乾山だ。

おそらく上野伊織の尋問の席に同席した一人で、磐音の長屋に忍び込み、置き手紙を残した人物であろう。

坂崎磐音は大銀杏の幹から一歩踏み出した。

それは磐音の、豊後関前藩を専断する宍戸はへの、戦いの一歩であった。

提灯の明かりが揺れて、二人の足が止まった。

「さ、坂崎磐音」

黒河内が驚きの声を上げた。

「お手回り組入来爲八郎、そなたの裏切りは許せぬ」

五尺四寸のがっちりした体の上に猪首が乗っていた。

外股の足賀鈴鹿に開かれて臨戦態勢をとった。

「上野伊織を拷問の上、得意の突きで刺し殺したは、昔の修学会の仲間、入来爲八郎だな」

「坂崎磐音、何の証拠があってそのように言いがかりをつける」

「突き傷がなによりの証拠。それに、鉄砲洲の料亭でそなたが早々に退席するのを見ておった。あの折り、宴に出るべきもので欠席したは御番組小頭三田村平とそこなる黒河内乾山の二人。そなたは三田村、黒河内と図って伊織を殺し、わが長屋近くの六間堀に捨てた。それがしに警告するためにな」

入来爲八郎から舌打ちが漏れた。

「警告の答えを持参した。御料車の命、いただく」

入来が草履を跳ね飛ばして足袋はだしになった。

剣を抜いた、正眼に構えた。

「黒河内、明かりをしっかりと持っておれ！」

入来爲八郎が命じた。

凡庸だが粘り強い攻撃。

一瞬でも手を抜けば必殺の突きに見舞われる。

黒河内は提灯を手にただ立っていた。

磐音は備前国包平を相正眼にとった。

再び西空が光った。

「坂崎、そなたは幼馴染の小林琴平を討ち取ったそうじゃな。その腕前、見て使わす」

入来爲八郎が磐音に動揺を与えようと国表の戦いに触れた。

「琴平と剣士と剣士が魂をぶつけ合った尋常の勝負でござった。そなたのように仲間を裏切り、抵抗できないものを死に至らしめる人殺しではござらぬ。

「おのれ！」

低い姿勢から入来爲八郎が突っ込んできた。

正眼の剣が磐音の右肩を襲った。

磐音の包平が弾いた。

入来はその事を承知で胴抜きに移行させた。

それも擦り合わせて防ぐ。

神田三崎町の佐々木玲圓道場、その兄弟弟子の対決だ。いずれも手の内を知り尽くしていた。

「居眠り剣法では一は斬れぬわ、磐音」

粘り強い攻撃の連鎖に付け入る隙はない。

磐音はただ相手の動きに先んじて跳ねた、弾いた、合わせた。

富士見坂の上から下へ戦いはゆっくりと移動していく。

寒夜の坂に生死を賭けた戦いが展開された。

黒河内の持つ提灯も死力を尽くす戦いを照らして動く。

入来爲八郎の酒臭い息が弾んできた。

反対に磐音は山深く水を湛えた湖面のように静寂を保った。

入来のほうが連続うちに倦み飽きた。

包平を叩き割る勢いで小手に落としたあと、包平の刃と絡み合わせながら態勢を入れ替え、間合いの外に走り出た。

磐音が追わなかった。

その場にとどまり、再び二尺七寸の長剣をゆっくりと正眼にした。

間合いは二間。

入来爲八郎が腰を沈め、剣を尽きの構えに移した。

「入来爲八郎の突き、拝見いたそうか」

「坂崎磐音、大言もそこまで…」

息を鎮めた爲八郎が動いた。

切っ先が磐音の喉元に向かって迷いなく伸びてきた。

磐音の正眼が八双へとあがりながら走った。

二間の間合いは一瞬のうちに死地に入った。

爲八郎は磐音の居眠り剣法が一段目を受け流すことを承知していた。

生死の境で手元に引き寄せ、二段目に必殺の突きを送り込もうと動いた。

磐音は受けの剣を捨てていた。

八双に移された長剣がそのまま雪崩れるように斜めに落ちた。

「ううっ」

爲八郎は引き寄せた剣を再び伸ばそうとした。

その瞬間、包平の切っ先が爲は爲八郎の左首筋の頸動脈を刎ねきった。

血飛沫が大きく円弧を描いて寒夜に散った。

磐音の包平はさらに、溜め一郎の必殺の突きを支えた両腕を切断していた。

どさり！

横倒しに爲八郎が倒れたとき、黒河内が提灯を投げ出して逃げ出そうとした。磐音が俊敏に動くと、

「上野伊織の仇じゃ」

と背中を深々と裁ち割った。

黒河内乾山は前屈みに崩れ落ちた。

寒風が富士見坂の上から吹き下ろしてきて、地面に落ちた提灯の明かりを燃え上がらせた。

春雷が光って、おおい町の枝が、夜空に羽を広げた怪鳥のように浮かび上がった。

磐音は豊後関前藩の上屋敷を眺めた。

提灯が燃え尽きる前、一瞬、屋敷の大屋根を浮かび上がらせた。

そしてゆっくりと闇に沈んでいった。

磐音は血振りをくれると

（伊織、仇は討った）

と心の中で叫んでいた。

だがそれは、坂崎磐音が一人挑む豊後関前藩宍戸派との、孤独の戦いの序章にすぎなかった。